

みると、注目するリッジは13日に消失しているが、その後このリッジより発したカット・オフ・ハイは、勢力は弱いながらも高緯度を西進しつづけているのがみとめられる。これをリッジにとると、第3図中×印を点線で結んだ軌跡が得られ、あたかもリッジが西進して新発生リッジに達しているように見える。従ってこの場合には高緯度を西進するカット・オフ・ハイに対応して、新たなリッジが本邦附近で発生し、それが本邦附近の北高型の原因となっている。

これは1954年4月下旬の型1に関する簡単な解析にすぎないが、本邦附近に北高型が出現する場合に、その前兆として西経160度に現われる気圧場の特性の一端を示しているものと考えられる。

以上のべた各型を現象的に次のように解釈してみた。

型4を除き、型1, 2, 3については、強風帯の軸の北上および弱風帯の軸の北上は中緯度高圧帯の北偏発達を暗示し、これが不安定波動へ発展して本邦附近の北高型と関係しているのではなかろうか、そして型によって不安定度の発展状態に差があり、型1の出現型式が本邦への影響が最も強いのではなかろうか、これらの差については、色々考えられることもあるが、シノプティックな裏付けなしにこれ以上のべることは単なる空論にすぎないと思う。また型4のようなノーザントレンドの場合

には強風帯の見掛上の北上現象と本邦附近の北高型悪天との直接的な関係は考えにくい。

結論としては、1954, 1955年において、半月平均500 mb面天気図から計算した西経160度の偏西風東西成分のイソプレットの強風帯の軸が北上して、ほぼ北緯55度~65度に達し、これに随伴して弱風帯の軸の北上が北緯35度~45度まで達している場合(型1)には強風帯の軸の北限到達後約5~6半月で本邦附近は北高型の持続的悪天となっていることが指摘される。

この調査は僅か1年半の資料によったものであるから、その本質的な当否に関しては将来の調査研究にまだなければならぬが、型1の出現後に本邦附近に北高型があらわれることは定性的に妥当なことと思う。ただしタイムラグが5~6半月ということは大気環流の状態によって伸縮するものであろう。また以上のべた型だけが本邦附近の北高型悪天を規定するものとは考えていない。異なった出現型式で本邦の東にまた西に兆候のあらわれることがあるであろう。しかし最近1年半の対応はかなりいちじるしいものがあるから、大気環流のくせが持続するものとみなし、1箇月程度の長期予報資料としては有用であると思う。

終りに平素懇切なる御指導をたまわる須田予報官および松山予報官に深く感謝致します。

## 天気予報

地学教育講座 11分冊

有任直介監修

148頁 150円 福村書店

この本は有佳氏が全体の監修を行い、構成は、I 天気図と天気(鍋島氏)、II 天気予報(鯨井氏)、III 気候(渡辺氏)、IV 天気予報の歴史(渡辺氏)、V 最近の研究上の問題(有住氏)となっており、附録に最近の入試問題が付けてある。監修者は気象界の将来を担って立つ人と囑望されている人であり、執筆者は予報の第1線に活躍されている気鋭の方々である。監修者の言葉では、高等学校の先生を対象としているが、内容は初心者にはちょっと理解のむづかしい表現が多いし、表現のあいまいさが目立つ。むしろ、気象事業に何らかの職でたずさわっており、気象学を一応は理解している人が、天気予報はどのような基礎にもとずいて、どんな方法で出されるかを知るために好適な本と言えよう。まだどちらとも判らない事柄を誤って断定している所も見受けられるし、掲載されている図版が、天気図原図をそのまま印刷したような、地点名までクチャクチャ入って、記号を見分けるのに苦労するような図が多い。また北半球天気図の地図の配列がバラバラで不体裁である。筆者は日本を中心として、北半球上の現象を説明しようとしていると思うが、できるだけ読者が理解しやすいように配列しなおされることを切望する。だが、図版を豊富にして理

解しやすくしようという努力は認められる。

この本に限らず、気象学の啓蒙書の執筆者にこの際お願いしておきたいことは、その本の読者がどの程度の理解力を持っているか、気象学を理解させるには、どのような道筋をたどって啓蒙していったらよいか、気象学の知識が単なる知識としてではなく、自然現象の一端として理解し、自分自分の生活環境の中に生かして行けるか。このような点にもう一段と御留意していただきたい。

この本で、この希望が一部実現されているのは喜ばしい。それは「天気予報の歴史」と「気候」に見られる。中でも「天気予報の歴史」はこの本の圧巻である。本当の意味での気象学史の市販書はないといっている現在、このような著書が出たことは喜ぶべきことである。内容に2, 3の注文はあるが、著者が将来この方面の研究を続行されて完成されることを期待するだけにとどめたい。この章は気象学ならびに気象事業に従事している人々の必読すべき章とも言えよう。

この本全体の内容から見ると、むしろ、天気予報の歴史を第1章に持って来て、以下、気候、天気図と天気、天気予報という順序にした方がよかったのではないだろうか。

一冊で天気予報の全貌が理解され、警報、天気予報の利用法等の、実際生活に密接な関係を持つ面をとくに取り上げて説いていることは、気象事業の啓蒙という点から時機を得た企画といえよう。非才をかえりみず書評をあえて行ったが、意をくんでいただきたい。(奥田穰)